

寄稿

# 歴史におけるパーリ語

R・ゴンブリッチ

古川洋平 訳

※本稿は、著書『仏教とパーリ語』(Richard Gombrich, *Buddhism and Pali*, Oxford: Mud Pie Slices, 2018) の第一章「歴史におけるパーリ語」(Pali in History) に掲載された論稿の邦訳である。本稿において「本書」とは、同著書のことを指す。「」内は翻訳に際しての補注。

たいていの言語は、それを使用した民族、あるいはそれが使用された地理的地域にちなんで名付けられるが、パーリ語の場合はそうではない。「パーリ」(Pali)の「i」の下に点を加えた Pāli とも綴られる(という言葉は、「暗唱する」というサンスクリット語の動詞語根

「path」に関連し、もともと「暗唱のためのテキスト」を意味した。

「パーリ」<sup>(1)</sup>は、「パーリの言語(Pali-bhāṣā)」<sup>(2)</sup>つまり「暗唱のためのテキスト(Pali)の言語(bhāṣā)」の略称に由来する。そのテキストはティピタカ(Tripitaka 三蔵)と総称され、文字通りにとれば「三つのかご」を意味するが、仏教徒はそれを「ブツダの言葉(Buddha-vacana)」として保持している。ティピタカは英語ではたいてい「Pali Canon (パーリ聖典)」と呼ばれる。周知の通り、パーリ聖典は口伝で編集されてい

た。では、パーリ聖典のテキストは本当に文字通りブツダの言葉なのだろうか？

ブツダはインド北東部で誕生し、生を送り、(およそ八十歳で)入滅した(当時は、今日のインドとネパールの間に見られるような国境は存在しなかった)。彼の入滅は、紀元前四〇〇年前後である。インドで最古の書き文字資料は、アシヨールカ王による法勅の碑文とされている。アシヨールカ王は、紀元前二六九―二三一年頃にインド亜大陸のほぼ全域を支配した(法勅の一つは聖典のいくつかのテキストに言及するが、それはパーリ語の聖典には無い)。そのため、紀元前四世紀の終わり、つまりブツダの入滅から一世紀を優に経た頃よりも前に文字が書かれたということは、まずなさそうである。

少なくとも「聖典が筆写される」時期まで、パーリ語のテキストはブツダの弟子である比丘・比丘尼によって保持されたが、彼らはそれを暗記し、暗唱することを務めとしていた。世襲の祭官カーストであるバラモンは、自分たちの聖なるテキストを口伝によって保持した。それにはヴェーダ語(Vedic Sanskrit)が用

語にあたるのだろうか？ この問いには二つの回答が求められる。すなわち、パーリ語の伝統そのものから導き出される回答と、現代の文献学者によって導き出される回答である。「パーリ語の」伝統について言えば、パーリ語はマガダ語(Magadhi)、つまりマガダ国の言語として知られていた。マガダとは、インド北東部の一部を指す古代の地名である。はっきりとした境界はなく、異なる時代には異なる範囲の地域を指すこともあるが、おそらくマガダは現在のビハール州(Bihar)とほぼ同一と見てよいだろう。この「ビハール」という名称は、パーリ語・サンスクリット語とも仏教の僧院に対して使われる言葉であり、この地域で仏教がいかに重要であったかが分かる。今日のビハール州の州都パトナー(Patna)は、マウリヤ帝国(紀元前四世紀後半―三世紀後半)の首都パータリプトラに重なる都市である。第三代の王アシヨールカは、パトロンを通じて、仏教がインドのほぼ全域に、さらには国外にも伝播していくように促進した。ブツダは成人期をマガダかその近くで過ごしたため、話した言語もそ

いられたが、その起源は「仏教よりも」はるか前であり、場合によっては現代も使用されている。「バラモンの口伝の」正確さについては証拠資料が十分にあるが、ここで仏教徒は彼ら「バラモンのやり方」を見習おうとしていたに違いない。バラモンと仏教徒は、両者とも「テキストを」一つも消失させないように最も心を配ったものの、そこには「テキストの」編纂と増広が多く見られた。

テキストがブツダ本人まで遡れると主張する場合、それはすべてのテキストがブツダまで遡れることを想定しているわけではない。「形成されたあらゆるものは無常である(諸行無常)」とブツダは言明したが、賢明な人であれば、保持された聖典のパーリ語テキストが、この長い歴史の中でまったく変化してこなかったなどとは誰も思わない。本稿(章)では、そのような変化が事実として当然起きたのだと考えていくことにする。これについては、学術的に論ずべき点が多く残されている。

パーリ語は、起源からすると、どういった種類の言語の地域のものであり、さらには彼の周囲もその言語を話したに違いない。そう信じられて、パーリ語はマガダ語と名付けられた。著名な註釈者ブツダゴーサ(Buddhaghosa、紀元後五世紀)は次のように書いている。子どもが他の言語を耳にしなかった場合、成長して「マガダ語」(われわれにとつての「パーリ語」)を自然と話すようになる。それが根本言語(他のすべての言語の派生元と推定される言語)であった。だが、古い資料には信用に足るだけの証拠がない。それどころか、ブツダは自ら話した言語を含め、あらゆる言語には習慣的な性質があると認識していたと思う。

パーリ語は、決してテラワダ仏教徒が用いていたパーリ聖典に限定されるものではない。仏教がインドの外に成立すると(スリランカがその最初である)、仏教徒は、ちょうどバラモンがサンスクリット語を使用したように、パーリ語を用いるようになった。その後、この「暗唱のためのテキスト」は、同じ言語の別のテキスト、とくにこのテキストに対する註釈文献と区別された。パーリ語の伝統には「アッタカ

ター (attakatha)<sup>(5)</sup> という註釈を示す特別な言葉があるが、これは字義的には「意味を語ること」を意味する。パーリ語は他の解釈書や年代記、やがて他の著作にも使用されたが、そのすべてが初期の經典と密接に関わっているわけではなかった。パーリ語は、教養のある仏教徒の話し言葉として、またコミュニケーションの手段としても使用された。しかしながら、取るに足らない例外を除き、パーリ語はテラワダ仏教徒によつてのみ使用され、パーリ語で記されたほとんどのテキストがこの宗教的伝統と密接に関連している。

### 聖典が文字にされる以前のパーリ語の略歴

以下、言語学の視点からパーリ語の初期の歴史を概観していく。

現代の文献学者はパーリ語を中期インド・アーリア語 (Middle Indo-Aryan) に分類している。インドの伝統では、これと同じ言語グループをプラークリット (Prakrit) と呼んでいる。両者とも、サンスクリット語——文献学者は古インド・アーリア語とも呼んでいる。

たとえば、十二世紀にビルマの文法学者により加えられた特徴がそれである。

#### ステップ②

サンスクリット語は、インド・イラン語派に属する。

#### ステップ③

インド・イラン語派は、インド・ヨーロッパ語族に属する。インド・ヨーロッパ語族 (印欧祖語) は、三千年から数千年前に黒海近くのどこかで生まれ、広大な地域に広まっていった民族が口にした言語 (方言を多くもつ) を、現代の言語学者が理論的に再構築したものである。<sup>(6)</sup>

パーリ語が英語と関連しているのかと不思議に思う読者もいるかもしれない。インド・ヨーロッパ語族には、直接の記録は残っていないものの、分布地域の南部や東部のシンハラ語やベンガル語から、北西部の英

語——から直接派生したものとして説明される。パーリ語の系統は、以下のように辿ることができ

#### ステップ①

古インド・アーリア語は、文法学者パーニニ (Panini, おそらく紀元前四世紀) によつて成文化された古典サンスクリット語と、古典期以前の言語であるヴェーダ語 (Vedic Sanskrit) に分けられる。学界では、ヴェーダ語の終焉した時期と古典サンスクリット語が誕生した時期の間、つまり紀元前五世紀から二世紀頃にパーリ語が生まれたという考えで一致している。本書の最終章で提示した説が正しければ、五世紀にブッダが生きた時期をより正確に特定できる (この時期に、『マハーバーラタ』や『ラーマヤナ』が書かれた言語、いわゆる叙事詩のサンスクリット (Epic Sanskrit) も起こった)。パーリ語は、このように中期インド・アーリア語の初期の形態として起こったが、ブッダの時代よりもはるか後に生じた特徴もいくつかある。た

語やケルト語派にいたる多くの現代語、さらにはいまや消滅した多くの言語までもが属しており、(印欧祖語は) これらの祖先である。言語世代間の段階がかなり恣意的であることを念頭に置けば、ほとんどの言語変化は漸進的であるため、パーリ語とアングロ・サクソン語——英語がこれに由来する——は、印欧(祖語)の孫ということもできる。それゆえ、文字通りに捉えずぎてはならないが、英語がパーリ語の一世代離れたまたいとこであると言ってもおかしくはない。

「サンスクリット語はインド・ヨーロッパ語族の中で最も古い」ということが広く知られているが、それは誤解である。たしかに、サンスクリット語の資料は(すべてではないにせよ) ほとんどのインド・ヨーロッパ語族の資料よりもはるかに古い。けれども、そのことは、サンスクリット語自体が後の資料の言語よりも古いことを意味するわけではない。口伝と筆写という二種類の資料を区別しなければならぬ。最古のサンスクリット語テキストである『リグ・ヴェーダ』の大部分は、紀元前の第二千年紀の後半にまで遡るとされ

るが（より正確な特定はできない）、優に千年は書かれることはなかった。上〔前〕に述べたように、インドにおける最古の書き文字資料であるアショーカ王の碑文は、紀元前三世紀の中頃のものである。おそらく書き文字はインドのはるか北西部（現代のパキスタン／アフガニスタン）でいくぶん早い段階から用いられたが、インド周辺の一般的な文化史からして、その文字はすぐに消滅し、その子孫も残らなかったようだ。アショーカ王碑文はサンスクリット語ではなく中期インド・アーリア語の形式で記された。（碑文に対応するよ<sup>9</sup>うな）その時代から残る書き文字テキストの直接的証拠はないものの、サンスクリット語と中期インド・アーリア語の両方のテキストが、紀元前二世紀あるいはそれよりもややく早くに書かれるようになったと考えるもつともな理由はあるのである。

入手できる証拠資料のそれぞれの特徴は、パーリ語の歴史について明晰に考察するうえで不可欠な要素である。時代を遡って見てみよう。パーリ語の物的資料は、驚くべきことにそのほとんどが最近のものである。

インドで発見された、紀元後五世紀前後と推定されている二つの碑文もあるが、そこには聖典のテキスト数字が残されている。これらは他の資料でも知られるパーリ語に非常に近い中期インド・アーリア語の一方言で書かれているが、発音上の違いがいくつか見られるため、ヒニューパー博士はこれを「大陸のパーリ語 (continental Pali)」と呼んだ。<sup>10</sup>

テラワータ仏教の史書によると、紀元前一世紀のヴァッタガーマニー・アバヤ (Vattagāmaṇi Abhaya) 王の治世であったスリランカ中部のある僧院で、パーリ聖典の書写が初めて指示された。<sup>10</sup> 特定のわずかなテキストも聖典（たとえば三蔵の一部）と見なすべきかどうかについては今日まだ解決していないものの、いずれにせよテキストを書き記すという行為は、聖典の内容を固定させたに違いない。

テキストを書き記すことは、原本をそのまま保存することほどに完璧な伝達を保証するわけではない。テキストが書写されるたび、間違いは起こるものである。聖典の註釈は、そのほとんどがブツダゴーサに

る。たとえば、スリランカやビルマ（ミャンマー）に残されたパーリ語写本は、十八世紀から十九世紀の間に書写された。タイ北部の多くの写本がヒニューパー博士によって近年広く知られるようになったが、これらは十六世紀のもので、その他の場所で見つかったほんのわずかな写本だけがより古いとされている。十二世紀のビルマでパーリ語の文法や韻律を体系化した文法学者は、後のビルマやある程度離れた別の地域における言語の書き方にかんがりの影響を与えた。<sup>11</sup> これら文法学者より前のパーリ語写本を分析することによって、後世の写本に保存された多くの点から言語が特定される。最古の証拠資料とされる四葉の聖典写本がある。これらはカトマンズで発見され、古文書学的には紀元後八〇〇年頃のものとして算定されている。数世紀前の北インドの原本から書写されたものと思われる。<sup>12</sup>

このカトマンズ写本を、パーリ語で書かれた最古の物的資料の一部とみなすかどうかは、ある程度定義付けの問題に関わってくる。古い印章にわずかな数字の長さのパーリ語の式文が書かれたものがある。また、帰される。主に古い資料を編集したものとされるが、かなり多くの異説が記録され、他にも（われわれにもはつきり分かるような）テキストの改変がそのまま見過ごされている。とはいえ、これらの改変は、テキスト全体から見ればわずかな程度に影響を与えるに過ぎない。それはあまりに限定されたものであるため、全体としての言語の特徴に対するわれわれの見解を曖昧にするものではない。この言語は間違いなく、われわれがよく知る、また今日の文法学で説明されているようなパーリ語であったと想定してよいであろう。

それでは、三蔵が書かれた際の言語であったパーリ語は、ブツダが説いた言葉とどのように関連しているのでしょうか？ 現代の学界は、両者を同定することはできないものの、パーリ語がインドのある時代の特定の地域に——それがブツダの生きた時代や場所に一致するわけではないが——生まれたに違いないと考えている。

近年、意見の幅も狭まってきており、正統のテラワータ教徒の「パーリ語がブツダの言葉と同一である

との」説明を認める必要はないと感じている人は皆、次のように受け止めてきた。

ブッダは、中期インド・アリア語のある形態（彼が遊行するにつれ、形態は複数になっただろう）の言葉を語った。ブッダが紀元前五世紀を生きたのなら、彼の話し言葉に最も密接に関わったサンスクリット語は古典期以前のものである。ブッダは、自分が口にしたことを自分の弟子が翻訳するのをはっきりと容認していた（音声そのものが神聖視されるヴェーダとは明確に異なる）。そして、ブッダの言葉を形式化したテキストトが、何世代にもわたって比丘や比丘尼の間で口伝によって保持された。ブッダの入滅時期とパーリ聖典が書かれるようになった時期は四百年近く時代の隔たりがあり、ブッダが暮らした地域と（パーリ語が書写された）スリランカ中部は約一五〇〇マイル離れていることも明白である。仏教とこのテキストが時を経て地理的に広まるにつれ、使用された方言も変化し、急速に広まっていったに違いない。テキストが書かれる前に、この方言間の違いが明確に概念的に説明された

ということとはなさそうだ。それは暗唱における「地域ごとのなまり (regional accent)」といった程度のものであったに違いない。

以上の点から、多くの人が次の点を付け加えることになるだろう。パーリ語は、最初の写本筆写者が採用した綴りの慣習に従い音声レベルで形成された。パーリ語の音韻組織には一貫性がなく、その多くが、あるいはほとんどが綴りの慣習に起因しているに違いない。仏教が起こって最初の数世紀の間、バラモンはサンスクリット語の音韻組織について徹底的に議論、分類していた。それは、サンスクリット語の音韻価値という観点から、中期インド・アリア語の諸方言を形式化し、検討することでもあっただろう。初期（たとえば紀元前）の仏教テキストはすべて中期インド・アリア語の形式をとり、これらが筆写されるようになる。パーリ語だけでなくいわゆる仏教混濁サンスクリット (Buddhist Hybrid Sanskrit) でも確認できるように、自分たちが使用するサンスクリット語の綴りに言葉を近づけていく傾向があった。たしかに、これは

パーリ語の歴史の中で繰り返し見られた傾向である。似たような例を考えれば分かりやすい。(たとえば)現代の小説家や脚本家が、ある英語の方言を使う登場人物が話すシーンを書こうとする時、その話される方言の発音を完全に転写して書こうとせず——それでは読者がほとんどついていけないので——標準的な英語の綴りに寄せようとするようなものである。

前の二段落の内容については、現代の学者のほとんどが認めるところであろう。ただ筆者は、パーリ語テキストがいかに生まれたのかについては、ある種未解決のままであると考えている。この問題については、別視点の問いを通じて新たな解決法を提示することができた。これについては本書の最終章で述べる。

### 過去千年間のパーリ語

パーリ語の前半史についてはこのくらいにする。ではそれ以後、パーリ語には何が起きたのだろうか？

テラワダ仏教の伝統、つまりパーリ語の社会的な伝達媒体は、知り得る限り、千年以上もの間スリラ

ンカとインド南東部にほぼ限定されたものであった。テラワダ仏教は十一世紀にビルマに伝播し、それから次の三世紀の間に東南アジア大陸部の残りのほぼ全域に広まった。各国において、パーリ語は周辺地域で使用されてきた主要な言語の影響をいくらか受けた。そのため、たとえばスリランカやインド本土の隣接する地域で書かれたパーリ語は、シンハラ語やドラヴィダ語による影響の名残がある。カンボジア（最初のパーリ語は、一三〇八―九年の碑文に書かれた）の一部では、パーリ語とクメール語の混交言語を發展させる程に影響を与えたが（本書では扱わない）、これは例外的であつたようである。

とはいえ、パーリ語の発展に影響を与え続けた主たるものは、サンスクリット語であつた。その歴史の中で、サンスクリット語の綴りへ、あるいは少なくともサンスクリット語の発音へと置き換えられる流れが、（先述した碑文やカトマンズ写本のように）繰り返し何度も見られた。この特徴は何を意味するのだろうか？ 再度、英語の例を取り上げてみよう。英語の方

言の中には、語頭の「h」がないものがある（たとえば、コックニー方言）。正確なコックニーを望む筆記者であれば、語頭の「h」を付け足して標準英語の発音に戻すだろうが、適合しないところに語頭の「h」を置く場合、「I [I]am happy to see you（お会いできて嬉しいです）」のような英語の綴りには戻さない。たとえば、十二世紀のビルマの文法学者は、パーリ語でこれと似たような功績を残したのだ。

ブッダゴースは、とくにテラワダ仏教教義の權威ある綱要書『清浄道論 (Visuddhimagga)』をパーリ語で書いたが、その構文や文体は古典サンスクリット語の影響を受けている。ビルマにおいては、文法学者による探究の後、作品は実際サンスクリット語をなぞったパーリ語で書かれるようになった。パーリ語に特有の語形や初期の語彙は保持されたが、サンスクリット語の語彙項目も発音の法則を機械的に適用してパーリ語へと変わっていった。サンスクリット語の文章も同様に、初期パーリ語の慣用句や形式の特徴にそれほど注意を払うことなく、パーリ語へと置き換えら

れた。その意味で、パーリ語の使用は、母語を異にする僧侶の間でコミュニケーション手段として役立つが、非常に人為的なものとなった。

辞書編集者はこういったパーリ語の後半史の段階を無視する傾向にあったが、これには理由がないわけではない。というのも、理論上は、サンスクリット語の語彙のどんな用語もその意味を変えずにパーリ語で表現され得たからである。さらに、言語説明という実用目的の上では、パーリ語の発展は、概してビルマの文法学者で終わったと見なされている。以上から、パーリ語は何世紀にもわたって変化と発展を経験してきたといえる。語形（文法上の変化）はそれほどではないが、発音、構文、文体、語彙の点ではかなり顕著であった。ヒニューパー博士が述べるように、パーリ語は「死」語というよりもむしろ、繰り返し形を変えてきた人工言語なのである。<sup>(14)</sup>

注

(1) 筆者は、英語で「パーリ」という名を用いる場合、音別符号を付さない。

- (2) K.R. Norman, *Pali Literature: Including the Canonical Literature in Prakrit and Sanskrit of All the Hīmayāna Schools of Buddhism* (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1983), 1-2.
- (3) K.R. Norman, "The dialects in which the Buddha preached", in Heinz Bechert, ed., *Die Sprache der ältesten buddhistischen Überlieferung: The Language of the Earliest Buddhist Tradition* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1980), 61-77
- (4) Norman, *Pali Literature*, 2.
- (5) 麻の藤(マノヅ) athakatha 阿含(アハ) 經(キョウ) 卷(クワン) 之(ノ) 一(イチ) 二(ニ) 三(サン) 四(シヨウ) 五(ゴ) 六(ロク) 七(シチ) 八(ハチ) 九(ク) 十(ジュウ) 十一(ジュウイチ) 十二(ジュウニ) 十三(ジュウサン) 十四(ジュウシヨウ) 十五(ジュウゴ) 十六(ジュウロク) 十七(ジュウシチ) 十八(ジュウハチ) 十九(ジュウク) 二十(ジュウジュウ) 二十一(ジュウジュウイチ) 二十二(ジュウジュウニ) 二十三(ジュウジュウサン) 二十四(ジュウジュウシヨウ) 二十五(ジュウジュウゴ) 二十六(ジュウジュウロク) 二十七(ジュウジュウシチ) 二十八(ジュウジュウハチ) 二十九(ジュウジュウク) 三十(ジュウジュウジュウ) 三十一(ジュウジュウジュウイチ) 三十二(ジュウジュウジュウニ) 三十三(ジュウジュウジュウサン) 三十四(ジュウジュウジュウシヨウ) 三十五(ジュウジュウジュウゴ) 三十六(ジュウジュウジュウロク) 三十七(ジュウジュウジュウシチ) 三十八(ジュウジュウジュウハチ) 三十九(ジュウジュウジュウク) 四十(ジュウジュウジュウジュウ) 四十一(ジュウジュウジュウジュウイチ) 四十二(ジュウジュウジュウジュウニ) 四十三(ジュウジュウジュウジュウサン) 四十四(ジュウジュウジュウジュウシヨウ) 四十五(ジュウジュウジュウジュウゴ) 四十六(ジュウジュウジュウジュウロク) 四十七(ジュウジュウジュウジュウシチ) 四十八(ジュウジュウジュウジュウハチ) 四十九(ジュウジュウジュウジュウク) 五十(ジュウジュウジュウジュウジュウ) 五十一(ジュウジュウジュウジュウジュウイチ) 五十二(ジュウジュウジュウジュウジュウニ) 五十三(ジュウジュウジュウジュウジュウサン) 五十四(ジュウジュウジュウジュウジュウシヨウ) 五十五(ジュウジュウジュウジュウジュウゴ) 五十六(ジュウジュウジュウジュウジュウロク) 五十七(ジュウジュウジュウジュウジュウシチ) 五十八(ジュウジュウジュウジュウジュウハチ) 五十九(ジュウジュウジュウジュウジュウク) 六十(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウ) 六十一(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウイチ) 六十二(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウニ) 六十三(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウサン) 六十四(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウシヨウ) 六十五(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウゴ) 六十六(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウロク) 六十七(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウシチ) 六十八(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウハチ) 六十九(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウク) 七十(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウ) 七十一(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウイチ) 七十二(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウニ) 七十三(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウサン) 七十四(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウシヨウ) 七十五(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウゴ) 七十六(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウロク) 七十七(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウシチ) 七十八(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウハチ) 七十九(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウク) 八十(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウ) 八十一(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウイチ) 八十二(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウニ) 八十三(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウサン) 八十四(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウシヨウ) 八十五(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウゴ) 八十六(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウロク) 八十七(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウシチ) 八十八(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウハチ) 八十九(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウク) 九十(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウ) 九十一(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウイチ) 九十二(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウニ) 九十三(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウサン) 九十四(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウシヨウ) 九十五(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウゴ) 九十六(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウロク) 九十七(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウシチ) 九十八(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウハチ) 九十九(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウク) 百(ジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウジュウ)
- (6) K.R. Norman "The origin of Pali and its position among the Indo-European languages" 『ペーリ語の歴史』 (Journal of Pali and Buddhist Studies) 第14号 一九八八年 一—二二頁。
- (7) Oskar von Hinüber, *Notes on the Pali tradition in Burma*, Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen. 1. Philologisch-historische Klasse (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1983), 67-79.
- (8) Oskar von Hinüber, *The Oldest Pali Manuscript: Four Folios of the Vinaya-Pitaka from the National Archives, Kathmandu*, Akademie der Wissenschaften und der Literatur, Abhandlungen der geistes- und sozialwissenschaftlichen Klasse (Mainz: Akademie der Wissenschaften und der Literatur: Stuttgart: F. Steiner, 1991).
- (9) Oskar von Hinüber, "Epigraphical Varieties of Continental Pali from Devanmori and Ramnagiri", in *Buddhism and Its Relation to Other Religions: Essays in Honour of Dr. Shozen Kumoi on His Seventieth Birthday* (Kyoto: Heitakuji Shoten, 1985), 185-200.
- (10) K.R. Norman, "The Pali Language and Scriptures", in T. Skorupski, ed., *The Buddhist Heritage* (Tring: The Institute of Buddhist Studies, 1989), 29-53.
- (11) Richard Gombrich, "Dating the Buddha: A Red Herring Revealed", in Heinz Bechert ed., *The Dating of the Historical Buddha: Die Datierung des historischen Buddha*, Symposien zur Buddhismusforschung, IV, Part 2 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992), 237-259.
- (12) Oskar von Hinüber, *Das ältere Mittelindisch im Überblick* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1986), 22-23.
- (13) Saveros Pou, "Sanskrit, Pali and Khmero-Pali in Cambodia", in J.G. de Casparis, ed., *Sanskrit outside India*, Panels of the VIII World Sanskrit Conference vols. VI and VII (bound together) (Leiden: E.J. Brill, 1991) 13-28.
- (14) Hinüber, *Notes on the Pali tradition in Burma*, 69.
- (Richard Gombrich / オックスフォード仏教学研究所創立者) (訳・まなかわ まゆみ / 東洋学術研究所研究員)